

第8回 文理融合シンポジウム

量子ビームで歴史を探る —加速器が紡ぐ文理融合の地平—

高エネルギー加速器研究機構（KEK）物質構造科学研究所（物構研）では、ユニークな特徴を有する大強度陽子加速器施設（J-PARC）物質・生命科学実験施設（MLF）にあるミュオン科学実験施設（MUSE）の世界最高強度の負ミュオンビームの優位性を生かし、文化財をはじめとする人文科学資料の研究にも活用できる可能性を秘めた、新たな非破壊研究手法を開発してきた一方、これまでも放射光や中性子などを用いて、様々な文化財科学の研究が行われています。

そこで、放射光・中性子・ミュオンなどの量子ビームを利用する文化財研究の第一人者が一堂に会して、これまでの考古学研究、並びに関連研究、更に分析技術を紹介し、文理融合研究の可能性を探る本シンポジウムを開催するに至りました。2019年度に、第1回文理融合シンポジウムが国立科学博物館、第2回が大阪大学中之島センターにおいて開催され、その後、第3回（2020年9月25～26日）、第4回（2021年1月28日～29日）、第5回（2021年9月9日～10日）がオンライン開催されました。第6回（2022年1月7日～8日）は大阪大学豊中キャンパス 南部陽一郎ホールにて、ハイブリット方式（オンライン型と会場参加型の同時開催）で開催してきました。前回（2022年11月2日～3日）は高エネルギー加速器研究機構 小林ホールにて現地開催が実現しました。今回は第一回の会場でもあった国立科学博物館にて、ミュオンのみならず中性子、放射光を用いた目覚ましい文理融合研究の成果や施設の各種性能向上などを、皆様で共有したいと思います。皆様のご参加をお待ちしております。

なお、11/3（金・祝）には、以下の先生方の一般講演を企画しております（詳細）。一般の参加者向けにオンライン配信いたしますが、シンポジウムにご参加いただく方は、会場でご講演をご聴講いただけます。

- 「ミュオンで見る」三宅康博 名誉教授（KEK 物質構造科学研究所）
- 「江戸時代の小判と丁銀に施された表面処理技術の変遷と系譜」
齋藤努 教授（国立歴史民俗博物館）
- 「中国古代青銅器の科学調査」廣川守 館長（泉屋博古館）
世話人代表 下村浩一郎（KEK 物構研）

2023年

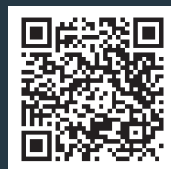
11/2^木・3^金

オンサイト開催

国立科学博物館 上野本館
日本館講堂

参加費：無料

参加申し込み・
プログラム等
詳細はWEBを
ご覧ください。



<https://www2.kek.jp/imss/msl/2023/09/8.html>

お問い合わせ

高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所
代表 下村 浩一郎
E-mail : bunri_yugo@ml.post.kek.jp

主催：高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所

共催：人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館、国立科学博物館

協催：J-PARC センター、大阪大学 核物理研究センター（RCNP）、日本中間子科学会、
大阪大学フォアフロント研究センター・先端ミュオン科学による文理協力型学術創出プロジェクト
SPRING-8 ユーザー協同体（SPRUC）文化財研究会